

教育研究活動データベースの充実化の取り組み

大規模大学の研究力情報は誰が保守するのか

今井 敬吾（京都大学 学術研究支援室） 古村 隆明（京都大学 情報環境機構）
mailto: imai@kura.kyoto-u.ac.jp

京大の包括的な研究者データベース

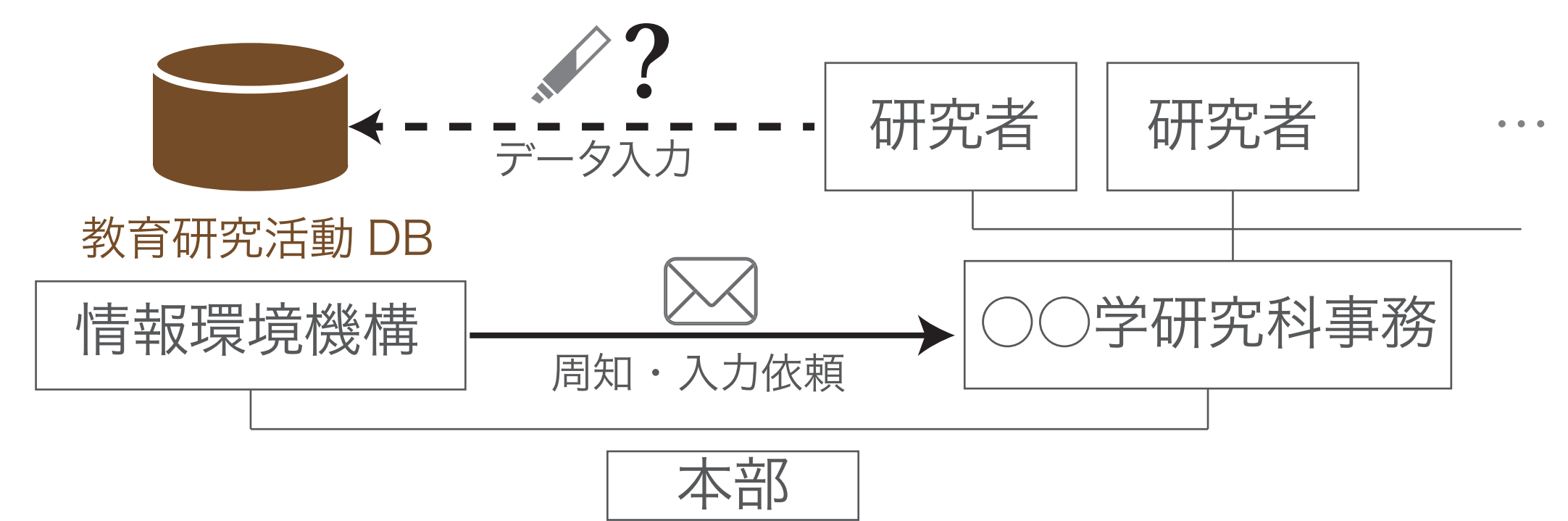
■ 研究情報システム (CRIS^{*)}) と URA

京都大学の教育研究活動データベースは、入力項目として基本的なプロフィールのほかに**文献**（論文・著書・学会発表）、**受賞**（学会賞、褒章）、**獲得資金**（科研、助成、共同研究）、**各種委員歴**（学会委員、査読委員、省庁・地方自治体の委員）、**特許**等を備えている。

研究情報システム (CRIS) は URA の活動を大きく**加速**し得る。研究者への**プレアワード支援**（資金情報の提供）・**研究支援戦略の策定**（大型資金獲得支援、大学ランキング向上）、**産学官マッチング**、**新領域の創出支援**（学際支援）…

*1: Current Research Information System

■ 京大の研究者データベースを取り巻く状況



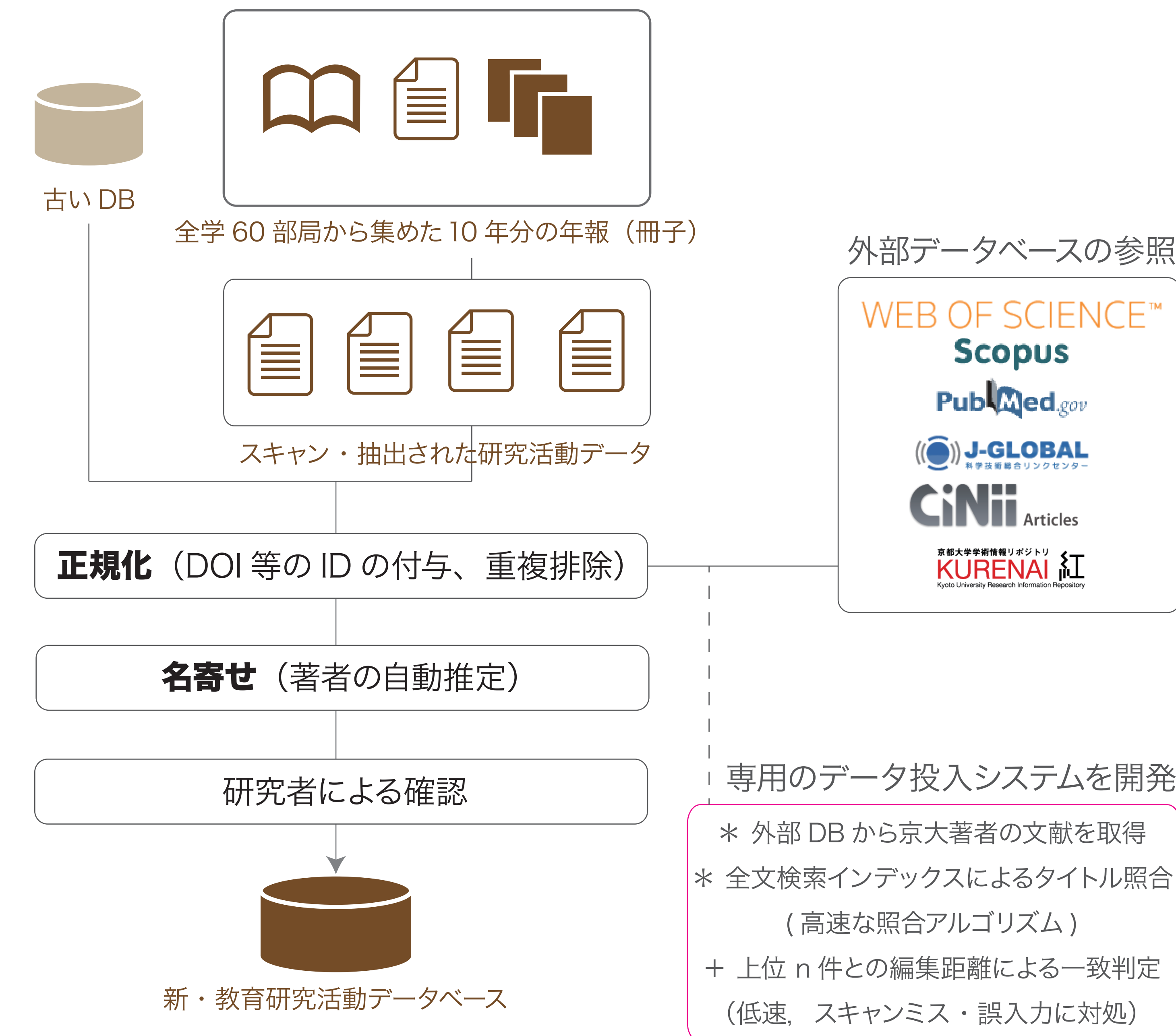
- ・ 入力しなかった場合の罰則がない → **未入力者が多数**
- ・ データが正規化されていない（重複多数） → **全学にまたがる分析が困難**
- ・ あくまで「教員自身が入力・管理するデータ」という位置づけ → **教員の負担が大きい**

教育研究活動データベース強化プロジェクト

■ プロジェクト概要

各部局が発行する年報 10 年分をスキャンし、教育研究活動 DB へ投入する。
（全体として非効率だが、網羅的かつ教員の負担が少なく、事務フローの変更も不要）

■ 研究成果データ投入の流れ



■ プロジェクトの成果

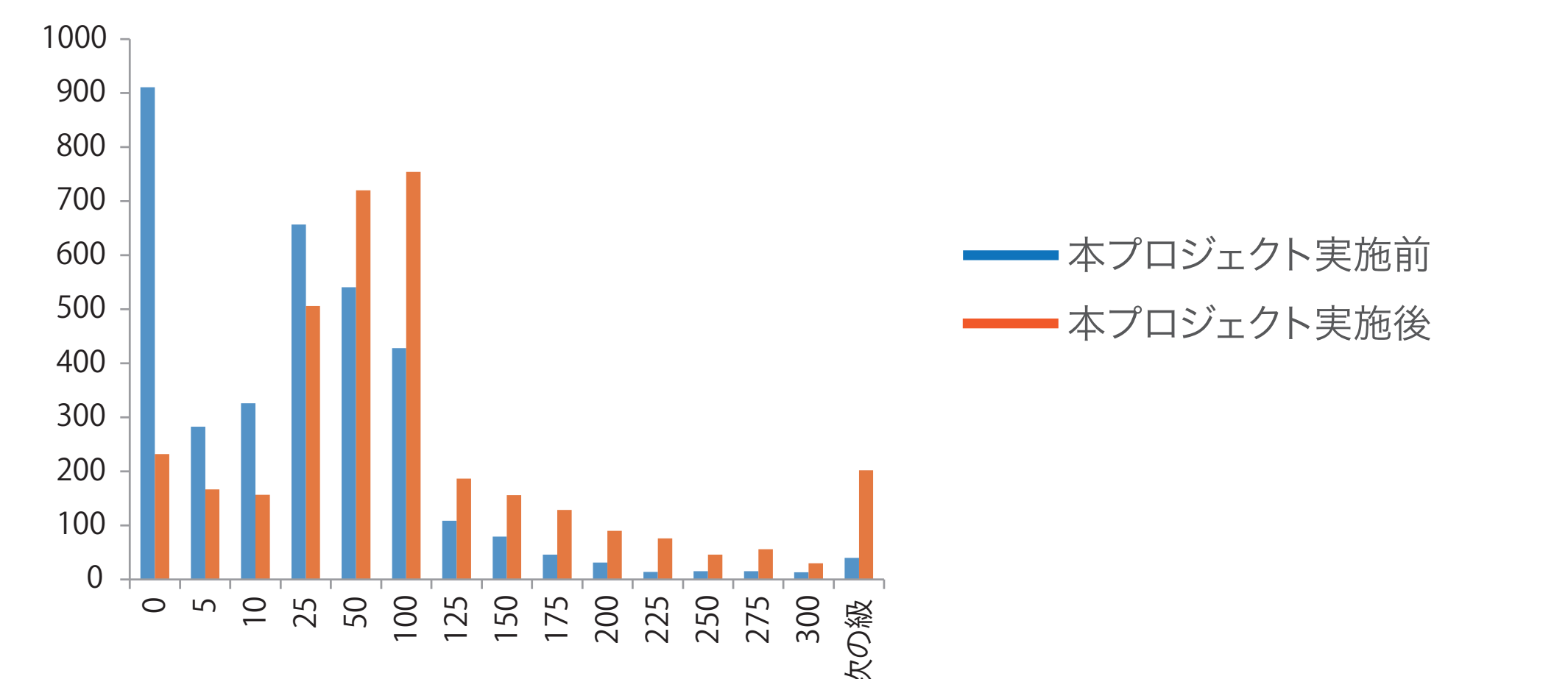
- ・ **論文件数の増加**（のべ論文件数、概算値）

14.9 万件 → 34.4 万件

- ・ **入力率の向上**（1 件以上の文献情報がある研究者（常勤）の割合、全体 3500 人）

74.0% → 93.4%

- ・ **入力件数分布の変化**（縦軸：人数、横軸：件数）



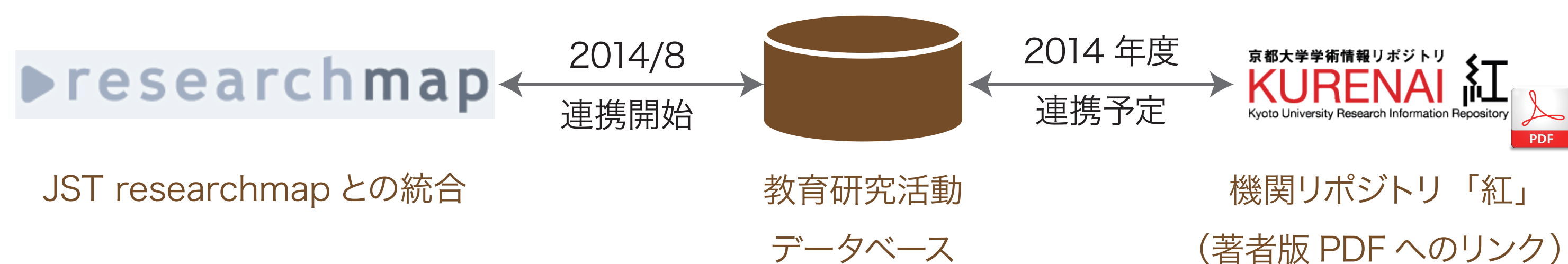
■ 研究者の反応

研究者自身が管理するデータを管理者側で「上書き（追加）」する試みであったため、学内では様々な反応が見られた。

- ・ 意義は十分に理解できる。（賛意）
- ・ 自分で管理できているので、余計なことはしないで欲しい。（オプトアウト方式の弊害）
- ・ この学会発表は論文と同等の扱いである。種別を変更して欲しい。（本人確認の重要性）
- ・ 書式が自分の入っていたものと異なる。元に戻して欲しい。（データ≠書式の周知不足）
- ・ 入力データに間違いがあった場合に誰が責任を取るのか。（責任ラインが不明瞭）

入力インセンティブ醸成のために

■ より広い visibility のために - 他データベースとの連携（進行中）



■ 利用価値の向上 - 各種サービスの展開構想（案）



研究力分析に向けて

■ URA 向け機能：研究者個人にフォーカスした分析ツールの提供（案）

- ・ URA のための**メモ機能**の必要性：研究者に関する付加情報を記録・共有
- ・ **予測的分析**の支援：これまでの共著歴・資金獲得実績等のタイムラインを視覚化

